

論文審査の要旨及び担当者

No.1

報告番号	甲 乙 第	号	氏 名	菅沼 明正
論文審査担当者	主 査	政策・メディア研究科委員	兼総合政策学部教授	小熊 英二
	副 査	政策・メディア研究科委員	兼総合政策学部教授	清水 唯一朗
		政策・メディア研究科委員	兼総合政策学部准教授	鄭 浩瀾
		京都大学人文科学研究所	文化生成研究部門 教授	高木 博志
学力確認担当者：				
菅沼明正氏の学位請求論文は、「制度としての文化財鑑賞－政策・観光・メディアの歴史社会学－」と題されている。本研究は、日本の文化財鑑賞の文化を、社会学的新制度主義の立場から制度として捉え、京都・奈良の古代社寺をめぐる言説や人々の行為の方向性がどのようにして現在のような形となったかを検証した、歴史社会学研究である。 京都・奈良の古代社寺とそこに安置されている仏像類は、「国宝」や「重要文化財」に指定されているだけでなく、教科書や出版物でも中核的な文化財と位置づけられており、観光旅行を中心にその地に訪れる行為が営まれている。しかし「国宝」などへの指定は、もちろん近代国家の成立以前にはありえなかった。また古代社寺は近代以前から宗教的な聖地ではあったが、「日本文化」とは位置づけられていなかった。 したがって、現在の状態がいつ、どのように成立したかは、一つの研究テーマになりうる。この視点から文化遺産の「文化遺産化」を研究することは、国際的にもナショナリズム研究や文化研究、ヘリテージ研究として行われている。菅沼氏の学位請求論文は、こうした国際的な研究潮流を踏まえ、京都・奈良の古代社寺とその仏像類が「文化財化」し、それを「文化財として鑑賞」という行為がいつ、どのように形成されたのかを研究したものである。 そのために菅沼氏が設定した理論的な枠組みは、社会学における制度論と、ナショナリズム研究の古典であるベネディクト・アンダーソンの研究である。ここでいう「制度institution」は、法律のように明文化されたものだけではなく、人びとが共有している規範や行動様式などを含む。さらにそのような「制度」が、京都・奈良の古代社寺をめぐるどのように成立したかを研究するにあたり、菅沼氏はアンダーソンが『想像の共同体』で提示したナショナリズム形成における公定ナショナリズム・出版資本主義・巡礼という三つの枠組みを用いている。なおアンダーソンがいう「巡礼pilgrim」は、官僚の広域人事異動によって、地域を超えた「わが国」という意識が官僚たちのなかに形成されるプロセスなども含んでいる。 菅沼氏はこうした枠組みを用いて、政府が行う国宝指定などの諸政策、教科書や観光ガイドブックの出版資本主義、そして人びとが京都・奈良を訪れる「巡礼」行為という三つの領域を、研究の対象として設定している。さらに菅沼氏は、社会学者のジョン・アーリーとスコット・ラッシュが大衆化した旅行について説明する際に用いた「経済的・技術的・社会的な発展」を組み合わせ、政策・出版・巡礼の三つの領域における経済・技術・社会発展のプロセスを、1870年代から1970年代までを対象に調査した。それによって、京都・奈良の古代社寺の仏像や建造物が、宗教的な信仰の対象から、「日本の伝統としての文化財」として「文化財鑑賞」の対象になっていく「制度」の成立を記述したのが本研究である。「経済・技術・社会的な発展」には、1920年代や60年代の都市中産階級の成立、出版・印刷技術の発展、輸送機関や教育制度の充実などが含まれる。 本論文は序章および第1～9章、そして結論から構成されている。第1章では、上記した理論的枠組みを設定しているが、以下では歴史的な論証をなす第2章から第9章を概観する。これらの章は、いずれも歴史学の先行研究を十分に踏まえたうえで、歴史学の査読論文としても認められている菅沼氏独自の実証研究を加え、上記した社会学の理論的枠組みを用いて統合されたかたちで記述されている。 第2章では、明治政府による文化財政策を調査している。明治政府は京都・奈良の古代社寺の				

仏像類を国宝として指定した。しかし社寺側の反発のため、仏像類を中央の博物館に収集することはできず、その所蔵と管理は各寺社にまかされた。これは革命時に国内の宝物を中央政府のもとに収集したフランスなどとは異なった展開であり、日本の文化財は、国の指定を受けた状態で京都・奈良の社寺に分散的に所蔵されているという形態になった。これがその後の制度化における初期条件、アンダーソンの表現では「配電盤switchboard」をなすことになる。

続く第3章と第4章では、人の物理的な移動の活性化と文化財鑑賞の普及との関係を記述している。鉄道網の発達という技術的な発展に伴い旅行が増加したが、都市部工場労働者の賃金が低く抑えられたという経済的な要因や、職場や学校を単位とした旅行プランの普及などの社会的な要因は整っていなかった。農村部を中心に社寺参詣を主目的とする団体旅行はあったが、文化財鑑賞という行為ではなかった。修学旅行はまだ一般的ではなく、旅行目的や行き先も多様で、京都や奈良に集中してはいなかった。

第5章では戦前期の出版メディアの発達と文化財鑑賞のあり方の関係、第6章では、戦時期における文化財鑑賞の文化形成について記述している。1920年代から30年代に奈良や京都の社寺を紹介する書籍類は増加し、これらを信仰の対象ではなく美術的な文化財として認識する見方の形成に貢献したが、これは知識人の一部に共有されるにとどまっており、旅行案内書や旅行雑誌、簡易ガイドブックにまではこうした見方は普及しなかった。また戦時期にも旅行の大衆化は進んだが、最大の旅行先となったのは天皇崇拜と結びついた皇室関連の聖蹟であった。

第7章と第8章は、戦前期までに整いつつあった人の移動と出版メディアのあり方が相互に機能する契機となった戦後における修学旅行の普及経緯を記述している。戦前期には、国宝への指定、知識人における古代社寺への視点の転換、交通機関の発達や旅行の大衆化は進んでいたが、それらが相互に機能しあう状態にはなっていなかった。しかし敗戦後の占領政策によって教育における皇室関連施設や宗教施設の訪問が禁止されたこと、さらに教科書と教員を經由して文化財として古代社寺をみる見方が浸透したこと、戦前期いらい整備されていた鉄道網や宿泊施設が利用可能になったことなどが連動して、修学旅行が「文化の見学」、すなわち文化財鑑賞という形態で京都・奈良に集中して行われるようになった。こうした修学旅行団体の往来が人の移動やマスメディア表象にも影響を与え、「京都と奈良では文化財鑑賞をするもの」という行為と認識が広く共有された。

第9章では、高度経済成長による旅行の大衆化、出版物の増大により、それ以前に修学旅行を通じて浸透していた「文化財鑑賞」という行為と認識が一般化する経緯を記述している。京都が「日本人の心のふるさと」という記述がガイドブックに登場したのは1966年であった。

結論では以上を踏まえ、学問上の貢献を明らかにしている。これまでの歴史研究では、京都・奈良の古代社寺は明治政府による国宝指定と教育政策によって「日本文化」とされたという見方がとられていたが、菅沼氏はこうした見解を修正し、実際にそうした見方が浸透するには出版資本主義や「巡礼」（人の移動）という「下から」の呼応がなければ生じなかったことを明らかにした。さらにこうした近代的なナショナリズムの形成は、経済や技術の発展に沿って直線的に生じるものではなく、初期条件である「配電盤」のあり方、米軍による占領政策といった歴史上の偶然にも影響されること、さらに経済・技術・社会の各要因が発展しても相互に連動しなければ機能しないことを明確に示した。

菅沼氏の論文は、日本における文化財鑑賞とナショナリズムの形成過程を明らかにした点で重要な事例研究である。同時に日本の事例から、ヘリテージ研究やナショナリズム研究に理論的貢献をなしうる示唆を与えた。これを既存の歴史学における諸研究を十二分に検討し活用して行っただけでなく、彼自身が一次資料を発掘・集計して実証部分も含めて実現した。審査にあたっては、社会学・政治学・歴史学と学問分野が異なる研究者が主査・副査を務めたが、どの立場からみても高く評価できるものと一致した。以上のことから、本論文の著者は博士（政策・メディア）の学位を授与される資格があるものと認める。